生田駅前再計画

Back Ground Concept
現在、東京近郊には「カオ」を失ってしまったまちが多く存在する。それは戦後の急速な近代化によって推し進められ、都市計画の結果である。それによって生まれた「アイデンティティ」やコミュニティは汚れ、我々が払う価値を持ちませんでした。まちとともに「ライオン」はどのように生まれるか？それは交流による。人と人が「カオ」を向かうことによって、そのまちの「カオ」も生まれる。存在なしにはまちは存在しない。コミュニケーションがそのまちをつくる。

本計画は「カオ」のないまちとして地元である生田をとりあげ、生田が本当にのあるべき姿を活かし、ゆとり・交流の持てるまちにするための都市計画を進めることを目的とする。コミュニケーションの促進策として、コミュニティ施設の創設がある。これは地域の人々に様々なプログラムを与え、コミュニケーションを促進させる。これによって生まれるコミュニケーションは使用者を含めて、その成果としての意識は生まれない。このコミュニティ施設に近接にある「商店街」から、生田の自然を生かした「ピオート公園」という2つの媒体を混ざさせることで、自然な形でコミュニケーションが発現し、それはまちの「カオ」をつくる。

Site
現在、北側駅前の通じ津久井通りにより商店街は分断され、安全快適に買い物ができる空間ではない。また南側も、自然を多く残しているにもかかわらず、その景観を場にとるビルが多くの川には洗濯物が干されている。それらをもう一度区画を整備することで安全な空間を確保するだけでなく、生田本来の形を取り戻す。

区画整備
1 津久井通りを北にずらす。
2 高架下を利用した車道の高架化
3 切り込まれた山の再生

New Site
津久井通りに面している商店街を北側に、南側には自然の姿を取り戻した景観を活かしたピオート・エコパークをつくり、それを軸にコミュニティセンターを配置する。

Zoning
様々なコミュニケーションが発生する仕組みとして、敷地の両端にコミュニティセンターを設け、それらを繋ぐ媒体として、商店街、ピオート・エコパークを南北中央に配置する。中央に配置された商店街の中にもコミュニティセンターとしての機能を分散させることでより活発なコミュニケーションが行われる。

Design Concept
Common Design
生田の自然は有機的なラインを想像させる。有機的なラインを生み出すものそれは円弧。円弧はその有機的なラインで人を導きいるとともに、様々な動線を自然に結びつける。円弧が繋がり動線によって各機能は結び付けられ、コミュニケーションを生み出す。

North Side Design
敷地は後述でCommon Designである円弧を結ぶ直線が生まれる。この横長の線にルーバーを用いる。ルーバーが作る動線の線はファサードを生み出すとともに、画面を伸ばしたり住宅側には目覚しにもなる。ルーバーの角度によっては北側にも光を取り入れることができる。

South Side Design
駅や接続道路の両端はその性質上垂直性が強まっており、広場であり、駅のホームや北側にも視線を開放するため、垂直性を求めてはならない。そこで接続部にだけ建物を置き、その間は遠かれていた。建物が、Common Designによって与えられた円弧が向けかかの山と対応するよう動線をつくりその二つを繋げる。建物のファサードにはミラーを用い、それは方向の自然を映し出し風情を増やす。